

## 小林秀雄 『おふえりや遺文』

——書くという秘儀の行方——

永藤 武

『おふえりや遺文』は、昭和六年『改造』十一月号に発表された、小林秀雄が三十歳の作である。表題が示すごとく、シェイクスピアの『ハムレット』の登場人物・オフィーリアが、その死に臨んでハムレット宛に書き残した遺書との体裁をとっている。言語行動の最も基本となる（私信）の設定において、翌七年の『Xへの手紙』と軌を一にしているものであり、言語主体が片や男性、片や女性という点でも、あたかも一対をなしているようである。私は先に本紀要創刊号で『Xへの手紙』を問題にした（「小林秀雄『Xへの手紙』——信じることと語ること——」昭和五十九年三月刊）。そこで今回はその姉妹作品ともみるべき『おふえりや遺文』をとりあげ、小林にとって書くという言語行為がいかなるものであったかを、更に追究してみたい。

『Xへの手紙』の語り手「俺」が、その人物像においてほとんど作者と等身大とみなされるのに対して、『おふえりや遺文』の場合には性を異にし、かつ『ハムレット』という出典がある。その点で虚構性が高いと同時に、読者にあらかじめ先入観の枠が与えられているという制約ももっている。が、一篇が『ハムレット』におけるオフィーリアと

ハムレット像を下地にしているにもかかわらず、『ハムレット』批評のための一文でもパロディーでもないのは確かである。また出典を承知していなければ理解・鑑賞をまっとうできないといった性格の作品では全くないのであって、これ自体完全に独立させて読むことが可能であり、そうすべきであろう。

『Xへの手紙』で、大きな比重をもって語られていることに、今は別れた「あの女」との問題があった。『おふえりや遺文』での書き手は、男に捨てられて狂気をはらみ、ついに自殺を決意した女である。ここによく指摘されるように、両作に共通して深い影を投げかけている作者自身の切実な経験、すなわち長谷川泰子との問題を窺いみるのは容易だ。事実、泰子との問題をここでは彼女の側から描こうとしながらも小林は、あまりに感情移入しがちな生ま生ましさに歯止めをかけるためにも、オフエーリアのイメージといった規制の枠組みを必要としたのではないかと推察されるのだが、ただしそれは、どうしようもなくなつて自分が捨てて逃げた女の心をはるかに思いはかり、綿密に再現してみようとの動機に発するものではない。

一篇では、生が、死が、夢が、心の悲しみが、狂気が、恋が語られる。しかし、それらを問題として論じるところに、一篇の主旨があるとは受けとり難い。全篇をつらぬいて、文体自体の色合いともみるべき言いようのない悲しみの調べが流れており、それはとりも直さず小林その人の心の、泰子への痛み悲しみの響きとの感が深いのであるが、その悲哀の流れのなから、執拗にも繰り返し立ち現われてくるつぶやきは、〈なぜ書くのか〉〈なぜ書かねばならぬのか〉といった設問なのである。

## 二

ハムレット様。

今は静かにあなた様におよびかけする事が出来るのです、

この静謐な呼びかけをもって、一篇は書き起こされる。深夜である。夜が明けて一番はじめの雲が出たら死のう、と彼女は心に決めている。「今はみんな終った。」と感じ、だからもはや誰も自分を脅かすことも誣すこともできないから「もう安心」だと自身に言いよらせる彼女の気持は、静まっている。

その「静かな気持を空々しいやうに思ふ」不思議な気持の中で、ほんとうに「みんなお終ひになる」はずの夜が明けさえすればと念じながら、今はイギリスに向う船上に居るであろうかつての恋人に、呼びかけ語りかける言葉を認めているのだ。

もうみんな終ってしまった心で、事実みんなお終ひになる時のおとずれを待つのみ、といういわば〈無の時間〉の中にあつて、彼女は言葉を綴ろうとする。その心は「まるでお魚が一匹も棲んでゐない海みたい」で、自分のそんな心が「何んとも口で言へない程悲しい」という。一体この作品では象徴的なイメージが多用されているのだが、この一匹の魚もない海が、死に通じているのは見易いところである。すなわち彼女は死んでしまった己れの心を悲しんでおり、その悲しみのあることだけが、今はかろうじて彼女の支えとなっている。何のための。死を決意し、その死の時の到来をただ待つことに耐えるのみの。そして、その悲しみが言葉を必要としているといった趣きである。

こうして我知らず言葉を綴り起こしながら、彼女はふと我にかえる。

それにしても、妾は何故こんなものを書き始めてしまったのだろう、何を書くともわからずに。(略)あゝ、妾は黙つてゐたい、かうして頑丈な櫛の椅子に坐つて、大きな机に肘をついて。(略)だけでもうどうして妾に

そんな力がありませう。そんな力があるのなら、なにもそんな、……不思議なことだ。

確かに、不思議というべきであろう。死をさえ決したはずの者が、たかだか数時間の沈黙に耐えられない。黙っていたいと望みながら、もはや沈黙に耐える力がないというのである。「そんな力があるのなら」とは、その沈黙に耐えられるのなら、死ななくともすむ、との意であろう。何を書くかもわからずに、ただ沈黙に耐えられないがゆえに言葉を記す。

ここに、人間はなぜ書くのかという設問が投げかけられているのは明らかである。自殺しようという人間が、なぜ遺書を認めるのか、なぜ一綴りの言葉を残さずにいられないのか。この自殺という一種の極限状態において沈黙を破り、何をか認めずにはいられないという状況設定で、問われているのは、書くということの根源的意味である。それはとりも直さず、作者小林が己れに発した問いに他ならないと言えないだろうか。この「何故」「不思議だ」に始まる問いは、以下一篇の終結まで持続し、反復され、展開される。書くという行為、文を遺すという人間のそして自分の行為を、改めて「不思議なことだ」と感じなす三十歳の小林の心に、この時どのような事件が生起していたのか、一概に測り尽くせないものがあろうが、少なくともこの問いが自己の存在とその生の意味を問うのとほとんど等しい深度から発していることだけは疑いないであろう。

止ませう、どうせ書いたつてうまく書ける筈もなし。何でもないので、ほんのつまらない事なのです。

もう夜で、かうして何やらわけもわからず書いてゐます。あとは、夜明けを待てばいいのです。かうして字を

竝べてゐれば、その中に夜が明けます。

どうせうまく行くはずもない書くという行為など、いつそ止めた方がいいとの声が、時折聞こえてくる。しよせんうまく書けるはずもないのに、わけも分らずただ字を竝べての、《無の時間》を消光するだけの手すさびではないのかと。

.....おや、おや、点々ばかり書いてゐて、どうする気でせう。女の手紙には、きつと、点々があるものだ、と、あなたはおつしやる。ありますとも、点々だつて字は字です。

わけも分らず竝べて書いているだけの字、すなわち意味を喪失した言葉の一典型が、点々であろう。彼女は、言葉に窮して点々を羅列する。意味をもたない点々のつらなりにただよっているのは、言いようのないその悲しみである。悲しみに閉ざされて「一足も動くことが出来」なくなってしまった心である。だが、彼女は止めるわけにはいかない。自殺を決意したのであるから、夜が明けるまでは生きていなければならない。だから、次のように「見糞らしい希望」を記す。

どうぞ、わけのわからぬことを書いてゐる、などとおつしやらないように。妾はきつと、自分の考へてゐる事など、ちつとも書いていないのに決まつてます。まるで別な事を、と言つても、何が別なのかも知りはしない.....それは無理です、あなたは、妾が今、どんな気持であるか御存じない。御存じなければ何をおつしやつても

無駄です。だから、無駄だと思つて書いてゐます。それに、もしかしたら、あなたにお話することだつて、これつばかしも、ないのかもわからない。どうやら妾は、かうして書いてゐるのが頼りなのでせう。あなたにお話でもしてゐなければ、どうしていいのか、わからないでせう。書くのを止めたら、眼が眩んで了ふかもわからないし、何が起こるかもわからないし、死ぬ事だつて出来なくなつて了ふかも知れない、折角、はつきりとお終ひにしようと思つてゐるのに。夜が明けたら、さう、夜が明けたら、それまでは、どうぞ、お喋りが、うまく妾を騙してゐてくれます様に、かうして書いてゐる字が、うまく嘘をついてくれます様に……

ここでは言葉は、伝達の用をなしてはいない。彼女は自分の考えを相手に伝えることをはなからあきらめてゐるし、第一、伝えるべき内容さえ判然とはしないのである。彼女にとって必要なのは、書くという行為それ自体なのである。読んでもらえるあても、もとより耳を傾けてもらえる保障など全くないままに、ハムレットに向つて話しかけるように書き続けることである。書き続けなければ、この自分が、世界が崩壊してしまうのではないかとでもいうような不安を彼女は感じている。

「書いてゐるのが頼り」とは、書く行為によつてそれを杖にしてかろうじて自分を支えているとの謂いであろう。もはや自分で自分を滅ぼすより他ない自分、守り育てていくべき豊饒な実りの一かけらも残つていない自分、それでもなお、すべてがはつきりとお終ひになるはずの夜明けまでの時間を耐える何らかの術をも持たない狐独な彼女に唯一残された杖が、書くという行為だったのである。

言葉を連ねることが、よしんば必然的に嘘をつき、自分を騙すことであっても、すでに守るべき何ものも持たない彼女に、嘘も騙しもついに何ほどのことでもない。かえつて《無の時間》をやりすぎりぎりの慰めででもあるか

のようだ。

そして、そのような地点で言葉を書き連ね続ける彼女に、やがて言葉というものの姿が、おぼろ気にも見えはじめたのである。

### 三

今になつて、わかつたつてどう仕様もない。けれど、だけど、妾には色んな事がわかりました。悲しい目に会ふと、ふと心に浮んで来る様に、色んなことがわかるものです。この世は空しいといふ事も、今こそやつとわかりました。まるで生まれた時から知っていた事の様にわかりました。と言つても、あなたには何やらおわかりになりますまい。

あゝ、この世は空しい、あなたのように気難かしいお顔をしてお使いになる、言葉ぢやない。誰の言葉でもない、人がいくら使つても、使ひ切れない風の様な、風のように何処にでもある様な、何の手応へもない様な、得体の知れない言葉なんです。こんな仕様もないくらゐ易しい、変哲のない想ひが、他にあるでせうか。

悲しい目に合つて、ふと心に浮んで来るように分つたとされる「この世は空しい」ということ。それが分つたといふのは、引用のこの文脈が端的に物語っているごとく、「空しい」という言葉の正体が分つたとの意味に他ならない。それは気難しい顔でしたり気に説かれるような思想言語などではない。従つてハムレットの思想でも、また他の誰の思想でもなく、要するに人間が一定の主義主張としてあたかも己れの所有であるかのごとく使用し利用することなどできないものだ、というのであろう。そしてそれは「空しい」という語に限つたことではあるまい。およそ言葉なる

ものの正体、本質がそうなのであり、彼女は「空しい」との語の実感体験とその記述行為を通して、言葉というものの「得体の知れない」正体にぶつかったのである。

「空しい」との言葉は「風」のようであるという。それは、定義も限定も説明も解釈も加工も及ばない、それゆえにつかみどころがなく得体が知れないという意味であろう。しかし己れの所有物として利用しようとかかるからつかまえどころがなくなるのであって、ふと心に浮んでくるのをそのままに感じとれさえすれば、この世に生きる人間の想いとしてこんな易しく当り前な感概はないのである。悲しみのきわみの空しさの中で、彼女はそうした生きた言葉の姿を察知したのであった。

だが、生きた言葉と親密に交わるためには、人間の心も生きていなくてはかなわぬことであろう。当り前のことをそのまま感じとるのは、とらわれ閉ざされた心には至難であろう。そして何よりも、閉ざされた心をひらくためには、唯一、己れの言葉を受けとめてくれると信じられる人間が必須なのである。

……いくら言つても同じことです。手応へはない、水の様に、風の様に、妾は何処へ行けばいいのかしらん、……夜が明けたら、いや、いや、そんなに急ぐ事はない、妾はかうして書いてゐる方へ行けばいい、書いてゐる方へはこんで行かれればそれでいい。でも何を書いたらいいのだろう。……言葉はみんな、妾をよけて、紙の上にとまつて行きます。……一体、何だらう、こんなものが、……こんな妙な、虫みたいなものが、どうして妾の味方だと思へるものか。妾は、もつと確かな顔をしたものにも、幾度も、裏切られて来た、例へば、……飽き飽きしました。ねえ、だから何か外の事を書きませう、だから、書いたつて書いたつて、ほんとうにどうしたらいいのだらう……あゝ、妾は疲れた。疲れて、あの剝げつつよろげた空が見える。あの空こそは……何も出来



ない証拠です……

彼女の筆は次第に性急さを増し、あえぎ、疲れを隠せなくなってくるようである。時として、今自分がハムレットに向けて書き綴っていることさえ、考慮の外になってしまふようだ。自分が幾度も裏切られて来た、言葉よりもっと確かな顔をしたものが、人間を暗示しているのは理解しやすい。複数で語られるその中に、というよりは中で最も重大な人間がハムレットに他ならないのは言うまでもない。「一体、何だらう、こんなものが」と、語りかけからはずれ完全な独白に沈んで行きながら、やがて「例へば」と言いかけ、しかし点々を用いた後に転調されるところで、例えば誰の顔が浮かんだのか、ことわるまでもあるまい。

誰も受けとめてくれる者のない言葉は、やはり彼女の心にもよそよそしく、冒頭であんなに静かだった彼女の心に、その空々しさはやがて無視できないひろがりをもってきたようである。書くべき何ものも持たない彼女は、しかも書かすにはいられずに言葉を綴り、書くことを杖としてその言葉に従い、言葉の指す方へ自分をはこんで行こうとした。しかし書くほどに言葉は自分を裏切り、彼女には徒労感からくる疲れがつのるばかりである。

疲労の極に達してほとんどくずれ折れるかとみえた彼女は、しかしなお氣力をふりしぼろうと努める。「いやな氣持になつて、吐きさうになつてきました。でも大丈夫、妾は止めやしません、止めたら大変です。それは、あなたもわかつて下さいますね、あなたはみんなわかつて下さいます。」と。そのためにハムレットが自分の言うところを分つてくれると、無理強いにも自身に言いかけるのである。

#### 四

この後、しばらくぼんやりしていた彼女は、やがて子供の頃に見た奇妙な夢の思い出を語りはじめた。その夢の内容は多様な解釈をそそる興味あるものだが、ここでは言及をとどめる。問題になるのは、夢を語った彼女が、次いで自分自身の分離現象を自覚するに至っていることである。

彼女は自分の「頭の中に誰かが坐つて」しきりに「何も彼も妾のせるぢやなかつた、私のせるぢやなかつた」といつているのを聞く。うるさいと感じ、夢を混同しているのかと思うが「いや、いや、やつぱり誰かが頭の中に坐つています」と認めざるを得ない。明らかな幻聴を伴った自己分離の現われであり、彼女が確実に狂気に一步踏みこんだことを暗示したものと解されるのであるが、注目すべきは、それと同時に彼女がこう語っている点である。

あゝ、いやなことだ、何といふ、いやな疲れ方をして来るのだらう。何処まで行つたら夜が終つてくれるのか、いよいよとなつたら、誰も助けに来てくれやしない、始末は自分でつけねばならぬ。……でも妾にはどうしても言ひたいことがある、

と。どこまで行つてもおとずれぬ心配のない夜明けを待ちあぐねいらだつた彼女は、自己の狂気を予覚し、いよいよとなつたら夜の明けぬ前に自分で始末をつけねばならぬと考えはじめたわけだが、そのときひるがえつて、「でも妾にはどうしても言ひたいことがある」と主張し出す。これは、書くことについての、それまでの姿勢とは明らかに転換した積極・能動的な意志と願望の表現なのである。そしてまたこれと軌を一にして、それまで自殺を決心した彼

女の既定の事実として触れられることのなかった死の問題が、はじめて直接の話題にのぼってくる。

生きるか、死ぬかが問題だ、あゝ、結構なお言葉を思ひ出しました。問題をお解きになるがいい、あなたのお気に召さうと、召すまいと問題を解く事と、解かない事とは大変よく似てゐる。気味の悪い程、よく似てゐます。いゝえ、この世で気味の悪い事といつたら、それだけだ。あとは、あとはなんの秘密もない人の世です。

無邪気が、どんなに悲しいものだから御存じなければ、無邪気だ、とおつしやつたつて詮ない事だ。いちめられる人が、どんなに沢山のものを見てゐるのか、おわかりなければ、それは又別のことです。無邪気な顔だつて、込み入つてゐます。大変な入り組み様をしてゐます。妾には、あなたの難しいお言葉が迎れたためしはありません。だけでも、あなたの難しいお顔はちやんと知つてをりました。隅々までも知つてゐます。

氣力をふるつて、彼女はハムレットに肉迫しようとするのである。そつばを向いた彼を振り向き返さずには置かないとでもいうような思いをこめて、真正面からいどみかかり、どうしても言いたいことをぶちまけようとする。

生きるか死ぬかを問題とし、それを解いたつもりになっていることがいかに空しく意味のないことか。生と死はこの世のたった一つの秘密らしい秘密で、これを解くのは人間の手にあまる。ただ生きてあるか、さもなくば死んでしまふか、道は二つに一つしかない。もとより回答のないところに問題を設定し、あまつさえ解いたつもりがいかにおめでたいか、と彼女は言いたげである。

加えて、かつてそんな悩みを悩んだことのない自分に向かつて無邪気呼ばわりしたその態度が、いかに心ないしう

ちであったか、彼女はうらみをこめて思いの丈を述べようとする。人を、それもほんとうに好きになってしまった人を分かつとはどういうことか、ほとんど確信をもって彼女は抗弁を試みるのである。言葉を巧みにあやつる術を知らない無邪気な頭が、しかし生きてある限りどんなにか入り組み、いかにたくさんのかを感じ続けてやまないものを、ついには自殺さえ願うものであることを、その悲しさを訴えずにはいられないのである。しかし、こうした思いは、

生きてゐることがあんなにこみ入つてゐるくせに、何と簡単におしまひになる……妾は今、何かが解つたのかしら、さうぢやないのかしら。ほんとうに果てなのかしら。……あゝ、言葉は何にもおしまひにしてはくれない。思ふまい、恐がる事はない、眼をあげたまゝ、眠る人もあると言ひます、妾も眼をあげたまゝ、眠ればいいのです。

……死ぬ時に何か書き遺すことのある人は仕合せです、仕合せだか、どうだか知らないが、それは妾の知らない人達だ、かうまで気持の白けるものか。妾だつて、さやうならぐらゐは言ひ度いものです、誰に、あなたにと言つては、口籠つた、妾をつかまへる羂が、いつでも待つてゐた。

との感慨をもって終息する。言葉は結局なんの解決にならないことを再確認した彼女は、決まりきつた別れの言葉にのみ、万感の思いを託そうとするのである。

夜明けが迫っている。彼女は、さっきの頭の中に坐つて言葉をしゃべっていた自分の分身が、今度こそはつきりと分離して、下の部屋で同じように同じ言葉を書きつけているのをみる。そしてやがてその分身が、外に出て行つたの

を、確かに感じとるのである。もうじき夜は明ける。彼女は急がなければならない。分身はすでに野原に向かい、入水すべき川に向かっているであろう。時は切迫している。目まぐるしく回転する急かされる思いの中で、しかし彼女は最期の時の時まで、やはり書き続けようとするのである。

月は出てるるかしら、あの石垣の角の処に。芝草はいつもの通りに濡れてゐて、茴香の叢は、まだ花はつけてない、樫の林の真ん中に、丸い穴があつて、噴水の先が光つてゐるだろう。みんな知つてゐる。隅から隅まで知つてゐるあの風景が、どうぞ、そのまゝでゐるように、何一つ壊れないでゐる様に。

この期に及んで、彼女の心は逆にひらかれせめようとしている。慣れ親しみ隅から隅まで熟知した自然に向かつて、露に濡れた草花が花ひらくように開かれようとしている。そしてその心に、祈りにも似た深い思いがしつとりとわきあがつてくるのである。この世界があるがままに何一つ壊れないでゐるように、と。やがてその思いは彼女に、書くこと、書き続けることの、窮極的な意味を開示してくれるかのようだ。

きつと霧が一杯に降つてゐる、どうぞ、小田巻草の紫の花が、そのまゝ竝んでゐます様に……階段は外されたし、廊下も、きつと、もうなくなつてゐるだらう。あれは何とかいつたつけ、何とかいふ鳥の洞穴から霧が出て来るのださうだ、いや、いや、無駄な事を考へまい。ちやんと書きつけてみなくてはいけない。……飛び下りる。飛び下りればいいのだ。跣で行かう、靴は履くまい。……足の裏が冷たくて、目を醒ましたりなんぞしてはいけないよ。お前は、すぐ目を醒ますからいけない。(略) あゝ、遠くまで来た、静かに、静かに……してなくちや

いけない、もうすぐ夜が明けます、さあ、ちゃんと書きつけてみなくてはいけない。……こつちの方の石垣の角に、一番初めの雲が出る、赤い、馬の形をした、若しも……そんな事はない、出てゐるに決まつてます、それで、もう安心だ、

あれが何だとかこれがどうだといった廻路を通らずに、彼女は直かに、素足で自然に飛びこもうとするのである。思いめぐらし考えまどうことなく、一輪の花がそのままにそこに存在し続けようとの祈りにかけて、最後の勇氣をふるい立たせ、架空の言葉の階段は外して一息に飛び下りようとするのである。このときなお書き続けるとは、従つて、熟知したあるがままの風景・自然を、見えるがままに、素足に直かに伝わってくる感触のままに、あれこれいじりまわすことなくちゃんと書きつけてみることを以外ではない。ちゃんと書きつけてみて、そこに存在するものの味わいを、確かに味わい尽してみることに他ならないのであろう。

かくて、自然にひらかれようとする彼女の心は、ひるがえつて恋人ハムレットに向けても、無防備の姿をさらし出すかのようである。そしてこのとき、彼女の心に、無数の言葉がよみがえってくるのである。くみつくせない泉のように、聞いて欲しいとの切実な思いに生かされた限りのない言葉が生起してくるのである。しかし、すでに時は無い。

……雛菊に、いらぐさに毛苣に、パンなんか要らないんです。パンの事など書く閑はない。もう、そんな暇はありません、もつと大事なことが一杯あるんです。ねえ、あなたは聞いて下さいませね、妾はあなたが恋しい、どうしても、恋しい、聞いて頂く事が一杯あるのです、一杯あつて、こんなに忙しいのに、何もパンの事なんかまるで狂気の沙汰です、いゝえ、ほんとうに気が狂つてゐたんです、嘘はつきません、ほんたうです、前にもそん

な事があつたんです。だから、みんな出鱈目です。前の方はお読みになつてはいけない、だから勘忍して下さい、あなたは怒りはしませんね、だから勘忍して下さいと言つてゐます、でも、もう大丈夫、気を取り直したから大丈夫です、花環だつて、ちゃんと拵へてあります、あなたのお机の上に、ちゃんと置いてあるんです、今、すぐ取つてあげます、待つて下さい、すぐ帰つて来ますよ、馬車も待つてゐます、そしたら、歌も歌つてあげます。

こうして『おふえりや遺文』一篇は閉じられる。ハムレットがこれを読んだかどうかもとより分りはしないが、恋しいと訴え聞いていたことが一杯あると書き遺すことのできた彼女は、あるいはやはり仕合せだったと言われるべきであろうか。少なくともこの時、彼女は再び〈生の時間〉に参入しようとしているからである。それにしても「そしたら、歌も歌つてあげます。」との結びの一言は、あまりに哀切な響きをたたえているのではあるが。

とまれ、作者・小林が、狂気をはらんで屈折し、目まぐるしく起伏転調する一篇の文体の中から、最終的に救いろうとしたのが、「恋しい」という彼女の一語であつたことは間違いないであろう。そのありきたりにも使い古されて誰のものとも言えない、それでいて明白な「恋しい」という思いが、訴えかけ聞きとどけて欲しいとの切ない願望を生んでやまない。彼女の真に書き遺すべき遺文は実はここからこそ始まるとみてよいのだが、しかしその単純でこまかしのない一語を見きわめそして認めるに至るまでには、やはりどうしてもこれだけの文章が綴られねばならなかつたところに、書くという行為にまつわる、ほの暗い秘儀のかげりが横たわつていとうべきかもしれない。おそらくはそこに、書くことの真の意味に踏みこむ入口がひらいてるのであり、『おふえりや遺文』でその入口に立つた小林は、間をおかずに一步をふみこむために、その実践として、『Xへの手紙』にとりかかつたのであつた。